

箱庭表現の位相についての一考察 — 箱庭遊びsandplayと箱庭作品sandplay-workのあいだにあるものとは —

伊藤真理子¹⁾・真壁あさみ²⁾・浅田 剛正¹⁾

1) 新潟青陵大学大学院

2) 新潟青陵大学看護福祉心理学部

キーワード：箱庭療法、遊び、子ども

A consideration about phases of sandplay expressions — What lies between sandplay and sandplay-works? —

Mariko ITOH¹⁾, Asami MAKABE²⁾, Takamasa ASADA¹⁾

1) Graduate school of Niigata Seiryō University

2) Niigata Seiryō University, Department of nursing and welfare

Key words : sandplay therapy, play, infants

I. 問題意識 —箱庭遊び？ 箱庭作り？—

箱庭療法においては、用意された砂箱の中にミニチュアを置くことで自己表現を行っていく。この技法の創始者であるKalff D.M. (1966/1972) は、箱庭療法をSandspielすなわち「砂遊び」と名付けていた。彼女は「お砂の上に玩具を置いて遊んでみたことはあるかしら？」と子どもを「砂遊び」に誘っている。また、「カルフ箱庭療法」日本版の著作の序文の中で、「箱庭療法において明らかとなるのは、人はその本質において〈遊ぶ人〉だということです。遊びにおいて、人は自らの全体性へと近づくのです。」とも語っている。Kalffの理論は時に象徴解釈に傾きすぎているとも評されるが、彼女が象徴的表現が箱庭の中に現れる際の「遊び」の要素を重要視していたことがうかがえる。

一方、砂遊びを箱庭療法として翻訳し、日本に紹介した河合 (1969) は、箱庭療法を絵画療法と遊戯療法の中間と位置づけているものの、日本における伝統的な「箱庭」では、ひとつの風景を作りあげ、作品として表現することが最終的に目指されており、箱庭療法においても「遊び」の動的側面は、それほどには強調されなかった。そして、日本における箱庭療法の基礎研究においては、最終的に出来あ

がった作品の特徴から箱庭を理解する試みが行われてきた (岡田 (1985)、木村 (1986) など)。現在でも、日本で箱庭療法を行う我々は、「箱庭を置いてみませんか」などとクライアントを誘う。このとき、砂箱の中に人形を「置く」ことで、何らかの世界を作品として表現することが暗黙裡にイメージされ、求められているのではないだろうか。

遊戯療法において子どもたちが箱庭を用いるとき、彼らは、一生懸命砂をかき集めて山を造り、トンネルを開通させようと躍起になる。砂に宝物を埋めて見つけ遊びをしたり、怪獣とヒーローを砂の上でぶつけ合わせ戦わせたりする。そこで行われているのはまさに「砂遊び」「人形遊び」といった遊びであり、それを描写するのに箱庭を「置く」という表現はなじまない。しかし、別の局面では、砂箱は精巧に作られた街とその中で暮らす人々を表現するパノラマの舞台となるし、盆景のような木々で構成された箱庭、棚を眺めていて気になったものをコレクションした箱庭、「公園を作ろう」とさまざまな遊具や動物たちを配置した箱庭は、絵画的完成を目指して置かれた作品である。こどもたちの箱庭につきあっていると、砂遊びから人形遊び、箱庭作品作りなど、箱庭という表現にはさまざまな位相のものが含まれることが考えられる。

さて、子どもたちによる箱庭表現の位相の違いは何によってもたらされるのであろうか。箱庭療法における遊びに関連して、弘中（2005）は、「箱庭における遊びの出現には発達水準の問題が関係していることが推察され」るが、これは「表象機能が未発達な子どもが行う感覚運動的な遊びとは異なる」と述べ、「子ども特有のイマジネーション能力が箱庭の遊びと関係していると思われる」と考察している。一方、発達上の問題を抱える子どもが、箱庭の中で砂を動かしたり、水を注ぎいれてかき混ぜたりする遊びをおこなうこともよくみられるが、これに関連して、河合（2007）は発達障害においては「テキスト以前が問題になる」ことから、「砂で遊ぶことが大きな意味を持つ場合が多い」と述べている。発達障害の心理療法（遊戯療法）においては、主体の成立以前、すなわち河合の述べる「テキスト以前」が問題となっており、「主体が立ちあがってくるような心理療法」（河合、2010）が目指されるのである。

弘中が述べる「箱庭における遊び」とは、「子ども特有のイマジネーション能力」が発揮され、人形や乗り物、怪獣などが力動的に用いられるものであり、そこに物語を読み取ることのできる、いわゆるアイテムをつかったごっこ遊びだと考えられる。ごっこ遊びをするにはアイテムを操ってストーリーを創造し展開していくための主体が必要となるし、また、作品を作るためには、箱庭の枠内をひとつの世界として見渡し認識する視点、すなわち主体の視点が必要となる。

一方、河合が述べた「遊び」とは砂遊びであり、弘中が述べる「感覚運動的な遊び」である。ここにおいては、象徴的表現を可能とする主体が成立する以前の遊びが展開されるのである。「遊び」として大まかに描写されて来た箱庭表現は、主体の成立、象徴表現の成立の前後でその意味が大きく変化すると考えられる。

発達障害者の箱庭療法においては、主体の成立のための作業が試みられる。それでは、発達障害を持たない子どもたちにおいては、象徴的意味を含まない感覚運動的な遊びから象徴的意味を含む人形遊び、作品作りへの発達の移行、すなわち、箱庭表現における主体の成立とその後の展開はどのようになされるのであろうか。

我々は、これまで幼稚園児の箱庭あそびの様子を縦断的に関与観察する中でその特徴を検討してきた

（伊藤他（2007）、真壁他（2008）、浅田他（2009）、伊藤・真壁（2008））。そのうち伊藤他（2007）では、幼稚園年少（3歳児）から年長（5歳児）の箱庭表現を検討し、幼稚園児の箱庭表現には以下の3段階が含まれていることを示した。

- （1）基盤・枠の形成の段階
- （2）玩具の意味の発生と物語による部分的な結合の段階
- （3）統合的な表現がなされる段階

上記の3段階はそれぞれ（1）砂遊びや玩具を並べる行為自体を味わう（2）箱庭の中で玩具が部分的なつながりを見せ、部分ごとにストーリーが展開される（3）箱庭をまとめた作品として表現する段階であり、（1）は感覚運動的な段階、（2）は象徴的な意味を含む人形遊びの段階、（3）は象徴的意味を含む作品作りの段階にあたる。この段階が個人内でどのように移行していくのかを検討するため、我々は、弘中（2005）を参考に「遊び」が「作品」としての表現に変化する小学校3年生までの箱庭表現を縦断的に収集してきた。本論では、収集された箱庭表現から一事例を取り上げ、子どもが箱庭の上で展開する表現世界の縦断的变化について検討したい。そして、箱庭遊びとしての表現と箱庭作品としての表現のあいだに何があるのかについて考えてみたい。

Ⅱ. 事例提示

幼稚園年少より小学校3年生までの間、箱庭遊びを行ったA（女児）の経過を取り上げたい。Aは、幼稚園ではまじめでおとなしく、あまり感情を表に出さない子どもとして幼稚園の教諭に受け取られていた。幼稚園の時期には年3回（1学期・2学期・3学期）S幼稚園の一室を使用して、小学1年から3年までは年3回（夏休み・春休み）S大学臨床心理センター内相談室を利用して箱庭遊びを行った。箱庭制作調査の方法は、伊藤他（2007）と同様、1回30分の時間枠で箱庭を介してなされる表現（遊びも含む）に関与観察した。なお、在学期限、休業等の都合により、経過の中で立会人3名が3回交代している。

1. 砂との関わり

#1-4 X年1月（3歳児クラス）-X+1年1月（4歳児クラス）（4歳5ヶ月-5歳5ヶ月）

3歳児、4歳児クラスの時期には、20代男性Pが立

会い箱庭遊びをした。身体が大きく寡黙な男性の立会人のことを警戒してか、ほとんど言葉を話さず、黙々と砂を触っていた。居心地の悪い雰囲気も感じられたが、毎回時間いっぱいまで砂に触れていた。

#1では、最初全く動かず、立会人が砂を触てみると、恐る恐る同じように砂を触りはじめた。砂をすくう、山を作るなど、立会人がするとおりに砂を触る。次第に砂を使う範囲が大きくなったところで立会人が触るのをやめると、立会人が使っていた領域を含め全部の領域を使って砂に渦を描くなどの砂遊びが広がった。

#2では、最初、砂に埋もれた石や葉を見つけては立会人に渡し、小さな範囲で砂を「触る」という程度だったが、その後立会人も砂を触ると同じように砂を握るなどする。立会人が砂を触るのをやめた後、触る範囲は広がり、砂の深さも深くなっていった。渦を描く場面もあったが砂を大きくほったり、つかんだり落としたりすることが多かった。

#3でも、次第に集中して砂と関わり、領域も真ん中に移り、砂の扱い方もダイナミックになった。手のひらで押すように砂を動かし、手の甲に乗った砂を落としたり、砂を手の中に溜めては落としたりを繰り返す。後半は、全身を使って砂をかき集めるなど動きが大きくなる。後ろにあるおもちゃを見るが、結局は触ろうとしないことが頻繁に見られた。

#4では、なかなか開始しようとせず、開始してからもしばらくは立会人に背を向けて砂を触っていた。気が散っている印象。砂をかき集めては平らに戻すことを何度も繰り返していた。

2. 立会人とのやり取り遊び

#5 X+1年7月(5歳10ヶ月) 5歳児クラス(写真1)

立会人が30代女性Qに変わった。箱庭に誘うと、すんなりと部屋に向かうが、視線は合わず、緊張が伝わる。入室してすぐに砂をいじり始める。〈どうぞ〉といって様子を見守るが、身体が緊張した状態が続いていたので、立会人も砂を触り〈さらさらだね〉と声をかけると、砂についてやり取りしながら触る範囲が広がり、笑顔が見られるようになる。砂の中に手をうずめ、指を動かして出てくるのを楽しむ。「一緒にやれば?」と手を出さずに見守っていた立会人を誘い、砂の中でお互いの手をつかみあったり、砂をこぼして立会人の手で受け取ってもらったりする。大きな山に手を突っ込んで立会人の手と出わせて笑いあう。小さな石やごみを「あげる」と手

渡す。

2人で徹底的にきれいに砂を寄せて底面を出し、砂と底面の2つの部分に左右で分ける。底面を出し終わると、「ここになんか置こう」と誘って花を青い部分に、木・貝殻などを砂地に置いていったところで時間となるが、立ち去りがたい様子だった。これまではクラスに戻って箱庭について何も話さなかったが、はじめて先生に「お砂で遊んだ」と報告があったとの事だった。

#6 X+1年11月(6歳3ヶ月) 5歳児クラス

引き続き立会人はQが担当した。前回よりも柔らかい表情で部屋に向かうが、入室すると、緊張した様子で手前の砂を指先でいじる。しばらくすると大胆に砂を向こう側に押すように動かし、戻すことを繰り返す。

小さな星の形をしたアイテムを見つけ、楽しそうに砂の中にかき混ぜるようにして、立会人に探すように言う。立会人が探し当てようとすると「当たり!」「ないよ!」と次第に声が大きくなる。ガラスのおはじきと星をたくさん隠すことにし、隠した上に目印としてお花を植えていくが、たくさん埋めすぎて、自分でもどこに隠したのか分からなくなり、2人で探すことになる。「今度は先生も埋めて? 分かんなくなるまで!」といって2人で隠し、「どこだっけ? 忘れちゃった!」といっていかにも新たに見つけたように見つけて「あった!」ということを繰り返す。終了時間を意識していて、急いで掘り出すが、途中で時間が来しまうと、「先生ここ全部探しといて」「難しかった?」など言いながら退室した。

#7 X+2年2月(6歳5ヶ月) 5歳児クラス(写真2)

立会人はQ。前回の遊びを覚えていたのか、すぐにうちとけてビー玉の宝探しを始める。「みんなバラバラに入っているよ」「一緒に探そうか。難しいね」などたくさんおしゃべり。立会人がビー玉を隠す役とみつける役の両方を求められ、〈じゃあ、見てないことにして隠そう〉といったのが気に入る、笑いながら目をそらして隠し、その後2人で「どこだっけ? 忘れちゃった!」と言いながら掘り出す。

最初は前回と同様に木の下にビー玉を隠しているが、「怖いのも入ってきました! ひひひー」と、恐竜も入ってきてその下にビー玉を埋めて掘り出す。サメ、キリン、ワニ、蛇なども加え、怖い物の下にたくさん星を隠して、自分が初めて発見したかのよ

うに掘り起こしていく。時間一杯、ビー玉見つけ遊びをして楽しそうに退室した。



写真1 #5 X+1年7月



写真2 #7 X+2年2月

3. 作品としての表現へ

#8 X+2年7月 (6歳11ヶ月) 小学校1年生 (写真3)

立会人が60代女性Rに交代する。また、S幼稚園内の一室から、S大学臨床心理センター相談室へと場所も変更する。はじめ、感触を確かめるかのようにゆっくりと砂に触り、繰り返すくってはさらさらと落とす。砂をいじっている途中に小さなみどりの葉っぱの切れはじを立会人に渡す。

フィギュアを眺めながら、「これ何?」「(虹)壊れているね」などと立会人に話しかける。聞く男たちの群れの中にぽつんとおいてある赤ちゃんに「ここにいる人たちが怖い。襲われる」というので、立会人が移動させる。なかなか作品が出来ないが、そのうち、星、青い花の木、巻貝、石をよく吟味しながらおく。さらにフィギュアを探している途中で時間が来る。手前半分が使われ、手の届かない向こう側は空いていた。箱庭で遊ぶというより物を置いて終わり、という印象だった。



写真3 #8 X+2年7月

#9 X+3年3月 (7歳7ヶ月) 小学校1年生 (写真4)

立会人は引き続きR。玩具の棚を探索し、「何これ?」と問いかける。時々砂に触って感触を確かめている様子。ごく小さい石を見つけて立会人に渡す。太った動物が背広を着て立っている玩具を見て「これ何?怪物?コワイコワイ」という。

虹を注意深く眺めてから中央近くにおいてみる。ビー玉の箱から濃い青色のおはじきだけを拾い集めて「すごいよ」と立会人に話しかけながら大切に箱の真ん中に置く。それを囲むようにテトラポットを埋め込む。それらを海に、向こうを陸地に見立てて針葉樹、桜と南天の木を植え、根元を星と貝で囲む。手前には気に入った貝を集め、小さな薄紫の花をおいた。大きなもみの木を右手に植えて、その枝に星や果物、貝を載せて飾る。もみの木の手前に針葉樹を植え、その根元を赤・緑・黄などの小さく丸く平たいガラス片全部を敷き詰めて飾る。伸びやかさが増え、立会人や場所にも慣れてくれたと感じる。



写真4 #9 X+3年3月

#10 X+3年8月 (8歳0ヶ月) 小学校2年生 (写真5)

立会人が再びQに交代。入室すると、「久しぶり」

とささやくように言う。少しずつ砂を触って何しようかな、と考えている様子。やり取りしながら次第に広い範囲の砂を触る。手元に山のように砂を集めてはぎゅっと押さえるようにする。ごく小さい貝殻を何個も砂の中から見つけ「面白い砂だね」。大きな砂の山を中心に作って「すごい」と繰り返し言う。針葉樹、広葉樹を山に植えていく。星やビー玉、貝を使って樹の根元を固める。時折時間を確認して、「急がなきゃ」といいながら木を植えていく。大体植えると、星、緑と白のビー玉をそっと山の周囲にちりばめる。貝や花もおき、にぎやかな山となった。時間ちょうどに「出来た」というが、心残りがありそうなので「少しくらいいいよ」と促すと、ウサギ3匹とキノコを置いて完成。「すごいおっきい山」と感心したように言う。迎えに来た母親に「何作ったの」と問われ、「登山した」と報告していた。



写真5 #10 X+3年8月

#11 X+4年3月（8歳7ヶ月）小学校2年生

立会人はQ。入室するとすぐに砂を触って、「いつもよりさらさら」等と話しながら砂を掘って真ん中に「谷」を作る。谷にガラス片や石、貝を丁寧に並べる。谷の向こうに虹を置いて奥の方に家、手前にお城を配置していく。柵の中を見て「こんなのも作れそう」「（ワニやサメが）コワイ」等とおしゃべりしながら作っていく。柵で囲んで、左中央部に豚の牧場をつくるが、よく見直して右に移動、空いたところに大きな3階建ての家を建てる。女性ばかりを家の中に入れていく。谷にもウサギやアヒルが置かれる。ビー玉と星を集めているうちに「やっぱり」と牧場を宝探しの場所に変更し、丁寧にビー玉を埋め、一つだけ当たりの宝物を入れて目印に星を置く。「初めて人とか家とか使った。すごくなった」と言って終了した。



写真6 #11 X+4年3月

#12 X+4年8月（9歳0ヶ月）小学校3年生

立会人は引き続きQ。すぐに箱庭に取りかかり、まず、柵を見て、家などをよく見る。蛇を見て、「怖いやつある」という、制作中にミミズをみつけて「これ気持ち悪い、触れない、やだやだやだ!!」というなど、言葉でやり取りをしながら制作する。

箱庭の左下の柵で囲まれたエリアを砂をならしながら丁寧に作り、柵の中には豚を並べる。大きい家を取り出して、牧場の横に置き、その脇に「オスとメスみたい」と犬小屋を2つ置き、ぴったり入る犬



写真7 #12 X+4年8月



写真8 #13 X+5年3月

を探す。橋を置き、ビー玉をならべて、右中央部に水辺が出てくる。橋の脇にはキノコを置いて、段差を工夫していく。遊具をおいた公園のエリア、その奥には石で囲まれた神社の神聖そうなエリアが出来上がる。また、木や柵を使って内と外のエリアが仕切られた。家の中、公園に吟味しながら人を配置していく。時間が来たが、まだ気になっている様子で、柵を見渡して終了した。「ここ（左）は犬を飼っているお家でここは橋を渡ったところの公園。〈神社は〉橋を渡っていると見える。〈家の人〉お父さん、お母さん、お姉さん、その次のお姉さんと一番上の男の子。」

#13 X+5年3月（9歳7ヶ月）小学校3年生

立会人はQ。この回で小学校3年生までのデータを取り終わるために終了となることを告げた上での制作である。

背も伸びてしなやかな少女の印象。恥ずかしそうにして必要以上のことは話さないが、笑顔である。まず、柵を選んで、箱庭の中にいくつもの囲いをつくり、動物をその中に入れていく。家畜、ゾウ、キリン。キリンは、最初2頭おこうと思ったようだが、柵内に収まらずにあきらめた。じっくりとビー玉を選び、カエルのいる水場を作ってその周りを針葉樹で囲んでいく。その後、柵の周りに家族や女子高生をおいて、見に来ている様子を作る。男の子、女の子を見つけて並べ、その脇にキノコやアヒルを置いて入場門を作っていく。洋風の家をじっくり場所を選んで置き、その周りに果物や星等をちりばめて楽しげな雰囲気を出す。ヤシの木やベンチを配して休憩するスペースも作る。時間を気にしつつもどうしてもおきたい感じで、赤いビー玉を選んで、家の前のアプローチを作って完成。「動物園。家はお土産屋さん。好きなのは、入口のあたり。」と言葉少なに立会人の質問に答えた。振り返りのアンケートには箱庭の脇に立つ本人と立会人のかわいいイラストと共に「毎回砂を触りながら何を作ろうか考えるのが楽しかったです」と記入されていた。

Ⅲ. 事例経過からの考察

1. 表現のベースとなる立ち会うものとの関係性

今回提示した事例Aの経過では、立会人が3回も交代した。経過を振り返ってみて、立会人の異なる#1-4、#5-7、#8-9、#10-13の4時期で

は、それぞれ表現のあり方が異なっていることが感じられる。#1-4では、男性の立会人に対して警戒心もあってか、言葉も発せず砂に向かって黙々と取り組んでいる様子があった。立会人とのやり取りは、ほぼ、時間の確認と箱庭の砂の中にある小さなゴミを渡すことのみだった。#5-7で立会人が女性になると、箱庭の中に立会人も誘い、砂と玩具を使った遊びが展開されていった。#8-9では立会人がより年長の女性に交代し、場所も大学内に変更となっていることから、立会人や場所への緊張感が感じられたが、言葉では立会人とやりとりしながら、何か作品を置こうとする様子を感じられた。#10以降は、再び立会人がQとなるが、#5-7の時のようなやりとり遊びではなく、立会人よりも箱庭と玩具に向かい合った作品作りが展開していった。心理臨床の実践上では当然のことながら、制作する者の状況のみでなく、受け取る者が誰であるか、表現者との関係性がいかなるものであるかによって子どもの箱庭表現は大きく影響を受けることがはっきりとみてとれた。箱庭療法の基礎研究においては、複数の者が立ち会った箱庭を同等のものとして分析する場合もある。しかし、立会人の影響を抜きには箱庭の表現は語れないことが実感された。縦断的に箱庭表現の変化をみていく際には立会人の与える影響について注意深く考慮していく必要があるだろう。

2. 砂とのかかわり

Aは、ほぼ毎回の制作で砂を触っていた。特に、#1-4には、玩具は全く登場せず、砂を大きくかき混ぜたり、掘ったり、寄せて山をつくったりすることを繰り返していた。この砂遊びは、まず立会人の動きを模倣することから始まった。砂で山などの何かを作ることを意図しない、ただ感覚や偶然性に身を任せたような砂との戯れである。模倣することから箱庭という環境への働きかけが始まったことは、箱庭表現をはじめの際に立会人との関係性がベースとなることを再度確認させられる。おそらく、立会人が砂を触ってみせ、箱庭へと誘う行為があつてこそAは砂と関わる事が出来たのだろう。#5以降は、まず本人と立会人との手が砂の中で出会うことから始まり、ビー玉などの固形物が砂の中に混じってくる。砂という固形であり流動である素材の中で感覚的に遊んでいたところから、関係性に支えられて、核となるような固形のアイテムとの関わりが生まれて来たようである。#6から始まる砂の

中にビー玉を埋めて見つけ出す遊びは、いいいいないばあのような在－不在遊びの性質を帯びている。隠れる（隠す）ものと見つけるものの役割が未分化であり、瞬間的・刹那的で、混沌とした砂の感覚の世界の中に少しでも核となるようなビー玉が出現し、それが何度も「新たに」混沌とした砂の中から見出されることを繰り返されていった。ここでは、立会人とAが共に「私」の核としてのビー玉を発見していく遊びが展開されていると考えられる。#8からは、作品としての表現に方向付けられていくが、最初に砂をならしたり、盛り上げたりなど、砂に関わることによって作品の基礎固めをしてからアイテムが砂の上に配置される流れがあった。最終回では、Aは「砂を触りながら何を作ろうか考えるのが楽しかった」と表現していた。砂を触る時間や砂の果たす役割は変化しているけれども、常に、砂との関わりはAにとって大きな意味が感じられる行為だったのだと考えることができよう。

3. 箱の中で2人で遊ぶ

#5で、緊張した様子で砂を触っているAに対して立会人は「さらさらだね」と関係を持つとする。そこから、立会人も含めた箱庭上での遊びが展開していった。「一緒にやれば」というAの誘いかけから、箱庭の砂の中でお互いの手が出会い（#5）、箱庭の舞台の上で2人は出会うこととなる。#4までの箱庭でも砂遊びを行っていたが、それは、主に砂の感触や形状を確かめるような動きであり、そこでは、立会人は導いてくれるものであり、見守ってくれる環境としての存在であった。しかし、#5において立会人は対等に遊ぶものへと変化していく。そして、箱庭は初めて2つの領域に分断され、これまで混沌としていた箱庭にアイテムが置かれる。これは、まさに河合（2010）の述べる、主体が生ずる過程における「分離」への動きであろう。#5でAと立会人がお互いに存在を確かめあったことから、先に述べた#6以降の在－不在遊びとしての主体の生成がはじまったのではないだろうか。立会人に繰り返し自らの存在を見出されること、繰り返してその遊びを遊ぶことによって、主体としての「私」が生じてくることが分かる。

その後、未分化だった宝探しは、花の目印をつける（#6）というルールが設けられ、「怖いもの」の下をおそろおそろ掘って見つけ出す遊び（#7）に発展していった。ビー玉という固有の意味を持た

ない無機質なアイテムだけを使った遊びから、象徴的な意味を持つアイテムも加えた遊び、より象徴的なやり取り遊びへと発展したといえるのではないだろうか。

4. 物語を内包した箱庭作品へ

#8では、Aの箱庭との取り組みのあり方が大きく変化し、「作品を置く」ことに方向付けられていく。これには、立会人の交代、Aの小学校入学、制作の場の変更など様々な要因が影響していると考えられるが、#7までの遊びをベースとした箱庭の発展を踏まえて生じた作品としての表現であるとも考えられる。

#8－9は、置いて終わりという印象の箱庭である。しかし、Aにとって「すごいよ」（#9）と表現するような風景のイメージが思い浮かんでおり、丁寧にそのイメージを箱庭の上で確かめていったのではないかと考える。#10では、さらに風景のイメージが一つの大きな山としてまとまってくる。これも「分離」の一つの形であろう。そして、初めて生き物（ウサギ）が箱庭に出現した。Aが母に「登山した」と報告したように、静的な風景でなく、自分もその風景の中に入り込んでいるような、迫力のある動きが感じられる風景に変化しているようである。さらに、#11からは、様々な人物も箱庭の中に配置された箱庭作品が作られていった。#13では、柵による枠が多用され、動物園の入場門（これは、動物園の内と外を示す）も含め、「内と外」すなわち他者と私が細やかに分化して来ていることが伺える。#11以降の作品では、「（神社が）橋をわたっていると見える」（#12）と話したり、動物園に入ろうとする男の子と女の子がいたり（#13）と、アイテムを動かしてはいないけれども、登場する人物の中に物語を託していることが感じられた。言葉では十分に説明されることがないが、特に、#13で置かれた箱庭では、池の脇に佇む老女や動物を見ている女子高校生などに何らかのストーリーが想定されている様であり、立会人もそういったストーリーを思い浮かべながら制作に立ち会った。

なお、Aは毎回のよう、柵の中に怖いものを見つけては立会人に伝えるが、それらのアイテムが箱庭の中に持ち込まれることはなかった。#7のやり取りでは「怖い」ものが箱庭の中で使われたが、それは遊びとして立会人との間に置かれたものだったと考えられる。怖いものなどのネガティブな性質をA自身

の要素として組み込み、作品に取り入れ表現するまでにはもう少し時間が必要なのかもしれないが、怪物やミミズが自分に働きかけてくるように感じる「怖さ」は、そのアイテムに内包する物語を感じとっている証だとも考えられるだろう。

このように、#8-13では、アイテムや作品に内包されている物語を感じながらも、一見静的でまとまった箱庭作品を作るということが生じてきた。この段階では、玩具は実際には動いていないけれど、その場面に至るまでの歴史や現在の登場人物の心情、これからの展望などが含まれた一場面のイメージが表現されている。箱庭全体を見渡し把握する主体の働きだけでなく、前後の歴史性、物語性も含んだ作品の全体性を抱えるような主体が生じてきて初めてまとまった箱庭作品としての表現が見られるのだと考えられよう。

Ⅳ. 総合考察—今後の展望と課題

以上のようにAの5年間にわたる箱庭制作を辿った。Aの箱庭制作においては、まず砂との感覚的な戯れが生じ、そこから立会人という他者が見いだされ2人で行う砂遊びへと移行した。さらに砂遊びは立会人と相互に行う在-不在遊びへ移行していった。遊びの中では繰り返し、主体の核のような固体（ビー玉）が生じ、発見され、確認されるような動きが表現された。その動きが精緻化され、動きの中に物語が生まれ、最終的に象徴的な物語が内包された箱庭作品としての表現が生まれ、発展して来たことが考察された。

主体の発生とその働きの変化に応じて、箱庭表現の位相がこのように異なるのだと考えられる。砂遊びは、ただ感覚的な体験だけではなく、段階を経て形やルールが作られ、作品としての表現へとつながっていく。また、作品としての箱庭表現は、ただ静的な一場面としてあるだけではなく、物語としての動き（遊び）が、切り取られた一場面の中に含まれているものである。箱庭がひとつのまとまった「作品」として表現される背景として物語を抱えることのできる主体の成立が必要であることが理解されよう。

今回は、一事例のみの経過を検討する中で、箱庭表現の位相について考察したが、この考察の普遍性については、今後複数の事例の展開を検討していく中でさらに検証を重ねる必要があるだろう。なお、

今回の調査で、立会人の変更によってかなり箱庭表現が変化することが確認された。立会人とのやり取りがダイレクトに箱庭表現として反映される幼児期の箱庭表現の検討に際しては、立会人との関係性を特に考慮して調査や分析を進める必要があり、これは縦断的研究を行う上での今後の課題である。

謝辞

本研究を行うにあたり、5年という長い期間に渡って調査にご協力頂きましたAさんご家族に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は新潟青陵大学大学院共同研究費の助成を受けて行われております。

引用文献

- 浅田剛正他（2009）：箱庭と遊び—幼稚園児の「箱庭あそび」の特徴について（3）— 『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』 第3号 pp45-54
- ドラ・M・カルフ（1972）：カルフ箱庭療法 p27 誠信書房：
Dora M. Kalff（1966）SANDSPIEL Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche Rascher Verlag
- 弘中正美（2005）：箱庭における遊びのもつ治療的意義 『精神療法』 第31巻第6号 pp675-681
- 伊藤真理子他（2007）：箱庭と遊び—幼稚園児の「箱庭あそび」の特徴について— 『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』 第1号 pp31-37
- 河合俊雄（2007）：箱庭療法の光と影 『臨床心理学』 第7巻第6号 pp744-748
- 河合俊雄（2010）：子どもの発達障害への心理療法的アプローチ 河合俊雄編 『発達障害への心理療法的アプローチ』 第2章 p27 創元社
- 河合隼雄編（1969）：『箱庭療法入門』 誠信書房
- 木村晴子（1985）：『箱庭療法—基礎的研究と実践』 誠信書房
- 真壁あさみ他（2008）：箱庭と遊び—幼稚園児の「箱庭あそび」の特徴について（2）— 『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』 第2号 pp37-46
- 岡田康伸（1984）：『箱庭療法の基礎』 誠信書房